

臨床検査技師のための 血算の診かた

岡田 定(著)

長野赤十字病院輸血部課長補佐/骨髓検査技師

徳竹孝好

初学者からベテラン技師まで血算を読む
スキルが上がる一冊

本書の特徴は、(1)豊富な症例の提示、(2)血算データのわかりやすい解説、(3)異常がみられた場合の検査技師の役割、(4)医師が異常を見逃す可能性があること、(5)医師も検査技師も異常を見逃してしまった場合、など、血算データをどう読むかで患者の診断と治療がいかにかに正しい方向に進められるかを解説している本である。各症例に医師と検査技師の見逃しやすさについて、それぞれ星マーク3つで示されている点も面白い。

私が岡田先生に初めてお会いしたのは平成25年の冬である。面識もない私の手紙一つで、長野県技師会の「信州血液検査セミナー」の講師として、湯田中温泉まで駆けつけてくださったことに役員一同感激したことを思い出す。さらに、当時先生が出版された『誰も教えてくれなかった血算の読み方・考え方』¹⁾の内容の一部を、症例を提示しながら熱心に講演いただいたことが昨日のことのように思い浮かぶ。またクームス試験(抗グロブリン試験)を考案したCoombs先生は「クームズ」と読むことを教えられ参加者は皆驚いた(本書にも「クームズ試験」と記載されている)。

『誰も教えてくれなかった血算の読み方・考え方』は、臨床医向けに書かれた本ではあるものの、われわれ臨床検査技師にとっても血算を通して疾患や病態を把握するには十分な参考書だった。しかし今回、姉妹品として『臨床検査技師のための血算の診かた』を出版された。先生の検査技師への思いが感じられる。前書もそうであるが、本書もその構成がユニークでとてもわかりやすい。前書は「血算データの提示」「一発診断」「確定検査」「最終診断」という構成であったが、本書は「血算データの提示」「どのような疾患や病態を疑うか」「検査技師としてどう行動する

か」「最終診断」「医師はこのように見逃す」「医師も検査技師も見逃してしまったら」という構成であり、まさに日常検査技師が行う仕事を、質の高い検査データとして報告できるように導いてくれる手順書となっている。

症例提示の他に、「Column」として先生の臨床医としての経験談が随所に散りばめられている点も興味が湧く。また採血量が多くシリンジで一気に採血して採血管に分注する際、混和不足で血球が沈んでしまうとヘマトクリットが偽高値あるいは偽低値になる現象や、日常の検査でのピットホールも記載されていてとても参考になる。

ただ一点おこがましくも要望するならば、検査データに単位が表記されていればさらにわかりやすいと思われる。検査技師は単位と有効桁数に人並みならぬこだわりを持っている人が多い。赤血球数が $400 \times 10^4 / \mu\text{L}$ と表記するか $4.00 \times 10^9 / \text{L}$ と表記するかで単位も変わってくる。

終わりに、血算は病気の診断・予後予測、治療方針決定と治療効果の判定全てに関わる有用な検査である。本書を利用することで、血算を読むスキルが上がることは間違いない。初学者からベテラン技師まで幅広い経験の臨床検査技師に本書の一読をお勧めしたい。

- 1) 岡田定：誰も教えてくれなかった血算の読み方・考え方。医学書院、2011



●B5/頁184/2017年
定価：本体3,500円＋税
[ISBN978-4-260-02879-0]
医学書院 刊